

# 社会的養護の新展開 8

— 施設の子どもは恵まれているのか —

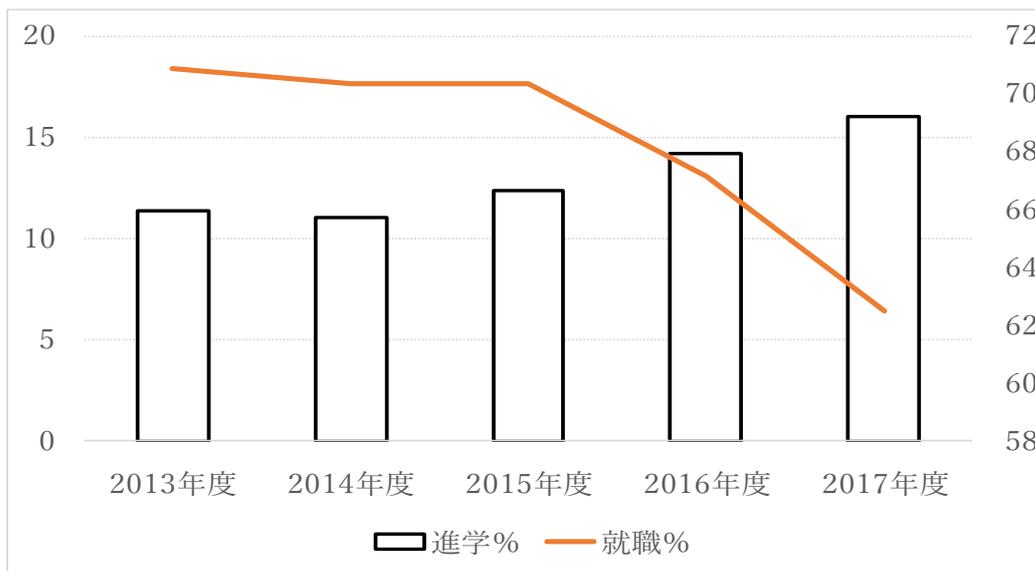
浦田 雅夫

京都造形芸術大学

「最近、一般家庭の子どもたちよりも施設を出た子どもたちのほうが恵まれていると思う。」そんな話を社会的養護関係者から耳にすることが増えてきた。確かに、近年、一定の就労期間により返済不要の貸付や給付型奨学金などいろいろな制度ができきて、これまでよりは改善してきたことは確かだろう。かつて、児童養護施設では子どもたちの高校進学という進路保障問題がひとつのテーマであった。世の中では高校進学率が上昇する中、「中卒で住み込み就労先を探す」困難さ不平等さが長年続いたが、社会的養護関係者や研究者のソーシャルアクションによって、いまでは世の中の全中学生と比べ極端な差はみられなくなってきた。しかし、高校を辞めるといふ状況になったとき、多くの家庭のようにセカンドチャンスは与えられているだろうか。いまでも、「高校」という所属がなくなったら、イコール施設退所と思いついて入っている子どもたちがいる。さらに子どもたちだけではなく、職員の中にもそう信じて疑わない方も、まだ実際におられる。

例えば、全日制の高校を中退しても、他の選択肢として通信制課程の高校もある。少子化で生徒数が減少しているが、通信制課程は年々増加し、進路変更ではなく入学時から通信制課程を選択する生徒が増えており、学びの選択肢が多様化している。世の中は、自分にあった学びを選んでいく時代、社会的養護の子どもたちは選択肢を制限されていないかと気になる。

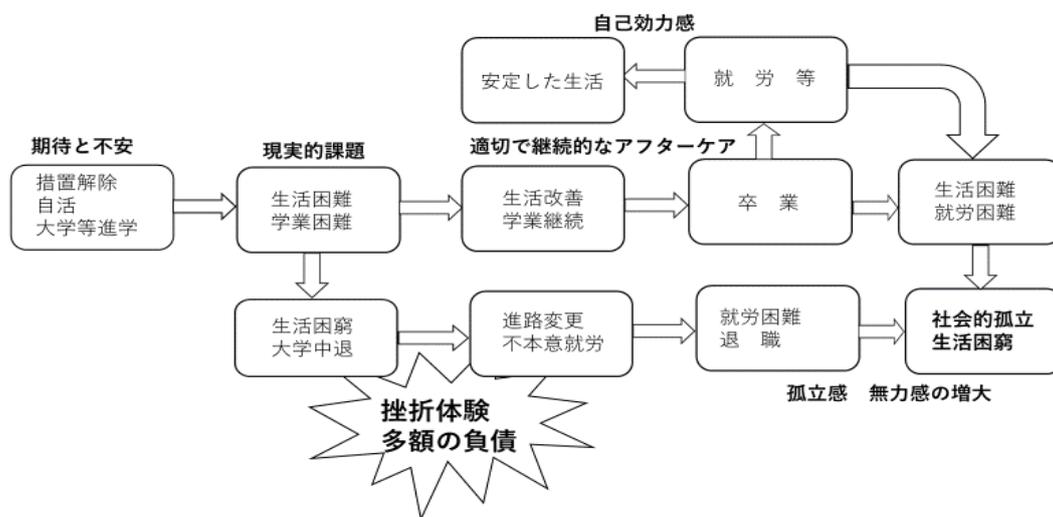
そして、次は、大学等への進学の問題である。



棒グラフは、児童養護施設から大学等（短大、高専含）へ進学している者の割合である。折れ線グラフは高卒で就職した者をあらわす。近年のデータからは、就職者の割合が減り、進学が増加していることがわかる。社会的養護のもとで暮らす子どもたちの進路保障については、かつての高校進学と同様、本人が望めば大学等へ進学する道も開けてくるだろう。しかし、問題は継続していけるかどうかである。

一般家庭でも厳しい状況の中、親からの支援を受けず、アルバイトをしながらなんとか大学を卒業した人もいるという。社会的養護のもとで育った子どもは甘いのではないのでしょうかという人もいる。厳しい生活状況でも大学を卒業できた要因は何か。できなかった要因は何か。できることなら、本人が望めば卒業できるほうがよい。

愛着対象の喪失や分離体験をベースにもつ社会的養護経験者にとって大きな挫折体験は心理的に死に近い体験として認知されてもおかしくはなく、孤独感が増大し、社会的孤立に至りやすい。挫折や失敗を糧として彼らが前に進んでいくためには、安心できる場と寄り添う人が必要である。



参考資料

厚生労働省「社会的養育の推進に向けて」2019年4月